

筆であって、むしろ訳文の通りに改めるべきものと思われる。すなわち……fa-jā'at-ni ma'idatun thumma nāwala 'l-mulūka 'l-arba'ata fa ja'at-hum mawā'idu となる。[Q] には、この箇所はない。

179) wa akalna kullu wabidin min ma'idati-hi la yushriku-hu fi-ha abadun. [Y], 724 には、wa akala kullu wabidin min-nā min ma'idatin la yushariku-hu fi-ha abadun, [Q], 615 には、hatta qaddama ila kulli wabidin ma'idatan la yushariku-hu fi-ha abadun とある。

180) [Y], I 724 には、「われわれ各自は、その食卓の上に残ったものを 宿舎 (manzil) に 運んだ」とある。[註] 253 を看よ。

181) wa-hum yusammuna-hu al-sujt li-yawmi-hi wa laylati-hi.

182) inna Allāha huwa 'l-malik.

183) Suyuf (al-Faḥ al-kabir fi ḡamm al-ziyadat ila 'l-jami' al-sughur, III, 329) は、Bukhari を引用して「『キリスト教徒がマルヤムの子を賛美したように私を賛美するでないぞ。私は、ただただ下僕にすぎぬのだから。』」そこで彼らは「ムハンマドのことを」アラフの下僕・使者 と言うことになった」とある ([D], 118 n. 1 引用)。

184) al-khatib, Ishaq (I. Hawqal) は、ブルガール国に関する知見があるハーティプ (khatib) の報告に依ったと記している (Ishaq, 225)。ここに出てくるハーティプが Ishaq のそれと同一人物ではないかとの議論がある。[註] 221, Dunlop, Khazar 100-103 参照。

185) 本文に続く 4,000 ディナール問題をめぐるブルガール王と [IF] との論争記事は、[Y] [Q], [AT], [AR] のいづれにも見られない。

186) [ZV], 47 n. 2 は、li-yulhaqa と読む。[註] 32 を看よ。

187) <ハザルの王>を指す。

188) すなわち 'Abdullāh b. Bashir のこと。

189) サカーリパの王は、バグダードの使節の中で、[IF] だけがアラブ人であって、使節の代表者は Susun ではなく、[IF] と考えていたのであろう。

190) al-usadh. ここでは <バグダード・カリフ>を言う。[註] 14 参照。

191) hatta ulhaqa は、訳文のように、「無事に 4,000 ディナールの金をとどけさせるため に」の意と思われる。

192) ka-anna-mā yatakallamu min khatbiyat.

193) yuthannu 'l-iqanata idha adhdhana.

194) yufrida fi dāri-hi 'l-iqanata.

195) wa-arāda bi-dhalika an yaj'ala-hu tarṭuq ila manāzirati. [ZV], 49 n. 2 参照。

196) 写本の ya'buni は、ya'nini と改める。

197) ikhtilaf.

198) jima'.

199) つまり、ハザル族によって隷属下におかれた <サカーリパ国民>のこと。

註

166) 此処の文は [Y], I 723-27 (Bulghar) に見られる。

167) al-mulūk al-arba'a.

168) 写本の fa-nazala-ha は、[Y], I 723 にあるように fa-nazala-ha と改める。なお、<テント>は qibab (qubba) とある。

169) 西暦 922 年 5 月 12 日。

170) [Y], I 724 には、「そしてホラズムの町 al-Jurjāniya からの距離は 70 日であった」とある。イブン・ファドラーン一行は、ジュルジャーニーヤを出発するとき、3 カ月分の食糧を用意していることから推して、写本の sab'ma (70) を tis'ma (90) の誤写と考えることもできる。Marvazi, 34 にも、「ホラズムからブルガールまでは 3 カ月間」とある。訳文は写本に従った。

171) [Y], I, 724 には、hatta ijama'a mulūka ardi-hi wa khawāṣṣu-hu (その他の諸王侯並びにその特權階層の人達が集まるまで) とある。

172) bi'l-sarji 'l-muwajjah ilay-nā (われわれに贈られた鞍) とあるが、[Y], I 724 にあるように bi'l-sarji 'l-muwajjah ilay-hi と改めるべきであろう。

173) 写本の本文は、man ḥadara min wujūhi ahli mamlakati-hi (その国民各層から出席の者) とあるが、これを <高貴階層>の意とした。

174) 以下の文は、[Y], I 724 には、ただ「そして私は、カリフの書簡を取出して読んだ。その間、彼は立っていた。次に私はワシール Ḥamid b. al-'Abbas の書簡を読んだ。そのときも彼は立っていた。彼は肥っていた。彼の下臣がわれわれに向ってディルハム貨幣をばら撒いた。次にわれわれは贈呈の品々を取出して、彼に差出した。また彼の妻にも贈った」とあって、会話の箇所は、[Y] ではすべて省略されている。このように、[Y] は、[IF] を引用する際、その会話部分を省略する場合が多い。

175) khala'tu [khila'an] 'alā imra'ati-hi. khala'a は <衣服を贈る>の意。

176) ziyy-hum. [Y], I 724 には da'b-hum とある。

177) 以下は、[Q], 615 (Šiqḍab) に引用が見られる。

178) 写本には thumma nāwala-ni fa-ja'at-ni ma'idatun thumma nāwala 'l-malika 'l-rabi'a fa-ja'at-hu ma'idatun (次に彼は私に [肉片を] 給仕すると、一つの食卓が私のところに置かれた。さらに彼は、第四の王侯に給仕すると、彼に食卓が運ばれた) とある。一方、[Y], I 724 は、「さらに彼は一切れを切って、それを彼の右側に置いた [第一の] 王侯に与えた。するとその王侯に食卓が運ばれた。また彼は第二の王侯に与えたと、食卓が運ばれた (thumma qasta'a qit'atan wa nāwala-ha al-malika 'l-adhi 'an yamini-hi fa-ja'at-hu ma'idatun thumma nāwala 'l-malika 'l-thaniya fa-ja'at-hu ma'idatun)」と記し、この箇所は、写本の本文にない。写字の際の脱漏と考えるよりは、[Y] による加

ガール)の地の緯度は高く、従って夏期の星[の日照時間]は、極めて長く、一方、夜は極めて短い上に、なおもどんなその夜の短かさはひどくなり、やがては薄暮から曙明までの間に鍋の料理をつくり上げることができない程にもなる (wa 'ardu arqī-him kachrun ḥatā inna nahāra ṣayfi-him fi ghayyati 'l-ṭulī wa layla-hum fi ghayyati 'l-qisari wa-yabluḡu min qisari layli-him an la yafi bi-naḍji qidrin fi-mā bayna 'l-shaḥaḥi wa-'l-ṣubḥi)と記している。Marvazi は、この箇所を Mas'udi に依ったと考えられる。Mas'udi, Murūj, I 182 には、ブルガール人達はカリフ al-Muqadir bi'llah の治世代にイスラーム教徒になった、と記されていることから推して、Mas'udi は [IF] 一行のブルガール訪問を知っていたのであり、上述の記事も [IF] の報告に依ったのではないかと思われる。

216) [Y], I 726 には、此処の本文に続いて、さらに「また、目没前にあった夕焼は、[そのあと] 全く消滅せず、夜間になっても (wa-idhā al-shafaḡu 'l-aḥmaru 'l-ladhi qubla 'l-maghribi la yaghību batta'an wa-idhā al-laylu), 人は互いに相手を失のどく距離よりもずっと遠くから識別できる程度のうす暗さである」とあって、前半の部分は、写本にはない。おそらく [Y] が文意を明らかにするために行った増補であろう。なお、本文の al-shafaḡu al-aḥmar は明らかに〈紅オーロラ〉の意である。

217) Marvazi, text 44 には、「彼ら (ブルガール人) の所から 20 日の旅程の、北極附近には、Isu と呼ばれる国がある (wa 'alā mastrati 'ishrina yawman min-hum nahwa 'l-qubḥi 'l-shamālī) baladun yuḡalu la-hu Isu) とある。

218) 写本の ghimāmat kabīran は、ghimāmat kubra の誤。この様に写本には文法的な誤りがしばしば見られる。ghimāmat と読めば、〈巨大な雲〉の意となる ([C], 99)。

219) ḥaḡḡa tanakabbada 'l-samā'u.

220) mawḍī'. [Y], I 726 には、此処は、ila nahrin yuḡalu la-hu Atīl (Atīl とよばれる河まで) とあって、mawḍī' の語はない。[註] 253 を看よ。

221) [Y], I 726 には fa-la yabluḡu-hu ila 'l-atmāt (al-'atamat) ila waḡḡi ṭulū' i 'l-kawākib とある。Iṣḡakhrī (I. Ḥawḡal) は、ブルガール国の夏の日照時間の差異について、一人のハーティブ (ḥaṭīb) の情報に依って記した。すなわち、「そのハーティブは私に以下のことを教えてくれた。彼らのところの夜は、夏には 2 ファルサフより多く人は通めない[程の短さである]。一方、冬には星が短かくなって、夜が長くなり、冬には冬の星は夏の夜[の長さ]と丁度同じになる」とある (Iṣḡakhrī, 225)。この記事は、[IF] の本文と甚だ類似しており、両者の知識の系統性を考える上での一資料となる。しかし、Iṣḡakhrī は別の箇所では、「さて Bulghar は町の名。彼らはイスラーム教徒。町には大モスクがあり、その町の近くには Suwar と呼ばれるもう一つの町がある。そこにも大モスクがある。さて、そのハーティブであった者 (man kāna yakhtibū) が私に次の様なことを報告してくれた。その町の人口数は約 10,000 人であり、彼らは本道の建物をもち、冬の間にそこをすみかとするが、夏には al-Kharkahar で過ごす」 (225) と述べ、

200) [IF] 一行のことではなく、キリスト教徒 al-Faḍl b. Muṣā のこと。

201) バグダード・カリフ Muqadir bi'llah を指す。

202) つまり Naṣr b. Aḥmad のこと。

203) ta'klma khubza-hu wa-talbasūna ṭhiyāḥa-hu. 字義通りに訳せば「彼らはカリフのパンを食べ、カリフの衣服を着る」となる。

204) Abu Bakr al-ṣiddīq (Abu Bakr al-Ṣiddīq) は、おそらくは [IF] のクンヤ (あざ名) と思われる。

205) 以下は再び [Y], I 725 (Bulghar) に引用を見る。

206) 写本には、bi-sa'at qiyāsiyat とある。〈標準時〉、〈標準時間〉の意があるが、意味明らかでない。[Y], I 725 には、qabla maghribi 'l-shamsi bi-sa'atin ufqa 'l-samā'i とあって、本訳はこれに依った。[Cz], 240 は 写本通りに in der gewöhnlichen Zeit の訳を採る。[K], 134, 201 n. 436 参照。

207) [Y], I 725 には fi aydi 'l-ashbah allati fi-hi qisiyun wa rimāḥun wa suytufun (翼の中にあるその像の手の中には、槍、刀と弓があった) とある。

208) qif'at ukhrā.

209) sa'at min al-layli. [Y], I 725 には ila qif'atin min al-layl とある。

210) qad waḡa'a ila tilka 'l-naḥiyati. この箇所は [Y] にはない。

211) 写本には adḥān al-'atamat とあるが、[Y], I 725 は adḥān al-'isha' と記す。

212) fa-abaddatnā bi-miqdāri mā yaḡra'u insānun aqalla min niṣfi sub'in とある。niṣfi sub' については、いろいろな解釈がなされているが、[ZV], 168-9 は sub' (ペルシア語の haftiyak) を中央アジアのイスラーム教徒達の通例に基いて、これを〈コーランの最後の 7 分の 1 (strat 48~114)〉と推した。一方、[K], 204 n. 459 は、コーランの一週間の日数 7 日に分けた言い方であるとしているが、いづれも承服し難い。[Y], I 725 は、この箇所を bi-miqdāri mā yaḡirru 'l-insānu niṣfa sa'atin (人が半時間とどまる程度) と改ざんしている。

213) fa-'l-'isha' 'l-akhrat. [Y], I 725 には fa 'isha' 'l-akhrat.

214) 此処は、[Y], I 725 には、「現在ほ、長くなりはじめたとは言え、嘗ては、これよりも短かった (wa-qad kāna aqsara min ḥadha wa-qad akhaddha 'l-ama fi 'l-ṭulī) 」とある。

215) 此処と非常に類似した記事が以下に述べる Mas'udi, Murūj, I 182 と Marvazi, text 44 に見える。Mas'udi は、ブルガール国 (al-Bulghaz とあるのは al-Bulghar の誤) を説明した文中で、「そしてブルガール国では、一年の内のある期間、夜が極端に短かい。彼らのある者が述べたところに依ると、何人も鍋の料理をつくり終えない内に朝が来しまう」と (wa-'l-aylu fi biladi 'l-Bulghar fi nihayatin min al-qisari [al-qasri] fi ba'ḍi 'l-ssanati wa min-hum man za'ama anna abada-hum la yastaḡu an yafrughā min ṭabḥi qidri-hi ḥatā ya'atiya 'l-ṣabahu) とある。また Marvazi は、「彼ら (ブル

[IF] の時代には全く存在しなかったブルガール国の2大都市 (Bulghar と Suwar) のことに言及している。従って、ここに出てくるハーティブ(man kana yakhtubu) は、先きの al-khaṭīb とは別人と考えられる。[註] 184, [ZV], 56 n. 1, Dunlop, Khazar, 100-103 参照。なお, [IF] 一行がブルガールの地を出て、帰国の途に上ったのは、922年の秋になってからであったことが、此処の写本の本文から分かる。つまり一行のブルガール滞在の期間は、921年の5月中旬から9月までの約4カ月間に渡ったと考えられる。

[Y], I 726 には、此処の記載を省いている。

222) [Y], I 726 には、「動機と天福・平和な年が彼らにやってくる (ta'ū 'alay-him sanat khishin wa barakatn wa salamatin)」とある。

223) [Y], I 726 に依って訳した (hatta anna 'l-ghuṣuna min l'-shajari)。写本には hatta imtadda 'l-layl idha 'l-ghuṣun min l'-shajari とあって意味がつかめない。おそらく写本の2行上の文 hatta imtadda 'l-layl wa-qaṣura 'l-nahar を誤って、此処に再び写してしまった、と考えられる。

224) 本文に続く [IF] が見た〈渾水〉の語は、[Y] になし。

225) 写本の Yaris は、Bari に改める。

226) 此処の本文は意味解し難い。写本では fa-idha (idhan) ana 'udan saghran akhdara ka-riqqi 'l-mighzali wa atwala と読める。[ZV], text 26 n.e は、fa-idha ana ara 'udan saghran, もしくは fa-idha ana bi-'udin saghrin と推している。[D], 128 には、fa ra'ayna 'udan... とある。また [R], 112 は、fi riqqati 'l-mighzali wa tulhi-hi (つむ糸の細さと長さの...) と改めた。[ZV] が読くように ana 'udan wa ana bi-'udin saghrin と改めるべきであろう。[IF] は、同様な用法を随所で使っている。例えば fa-idha ana bi-'l-rajuli。[註] 280 を看よ。

227) 写本の 'ala ra' si 'l-farqi (al-firaq) は、'ala ra' si 'l-irqi と改める。〈発芽の時に〉の意とも解せる。[D], 128 参照。

228) habb.

229) rumān amliṣi. [K], 203 n. 498, [ZV], 58 n. 5 参照。

230) khall al-khamr.

231) ta'kulu-hu 'l-jawāri fa-yusammā 'alay-hi とあるが、ta'kulu-hu al-jawāri fa-yusammā 'alay-ha と改めるべきであろう。[Y], I 726 は、ta'kulu-hu 'l-jawāri fa-yusammā (彼等は、それを食べると必ず肥る) とある。[D], 128 は [Y] に依っている。[K], 208-9 n. 500, [ZV], 59 n. 1 に詳しい。

232) shajar al-bunduq.

233) saqiyhi (?) は saq-hu に改める。

234) [Y], I 726 には khūṣ diqāq (薄手の葉) とある。

235) 写本の illa anna-hu mujāma'un ya'jizu (yajī'una) illa mawqī'in ya'rifuna-hu min saqīhi は、[Y], I 726 には、illa anna-hu mujāma'un ya'miduna illa mawqī'in min saqī hādhihi 'l-shajaratī ya'rifuna-hu (ただし、それは密集している。彼らが知っている

その樹木の幹のある所に近づく) とある。

236) 此処を [AT] ([ZV], 60 n. 1) は引用しているが、樹木の生えている場所を本文とは別の地域のことと誤って記している。つまり「ホラズムの辺境には、ある樹木がある。人々がその木に穴をあけると、そこから蜜が出てくる。人がそれを1ラトル飲むと酔ってしまう」とある。[註] 159 を参照。

237) 写本には wa-akthar と akal との間にピリオドの印●があるので、akthar は前文につづけるべきであるが、訳文のように aktharu akali-him (彼らの食物の多くは...) と続けるべきであらう。前文につづければ、「酒がより多く飲まれたように……」。彼らの食物は……」の意となる。

238) laḥm al-dabbat. [Y], I 726 には laḥm al-khayl とある。

239) ブルガール国では、当時、未だ農産物に対する納税の義務がなかったことは興味深い。つまり牧畜、商業的経済が社会の中心をなしており、農業は、I. Rustah, 141 が言うように Atil (ヴォルガ) 河周辺でわずかに行なわれていたにすぎないことを示している。

240) samur. [Y], I 727 には jild at-thawr (牛の皮) とある。

241) これに続くブルガールの賦課税、食物貯蔵についての記事は、[Y] になし。

242) min zillatin l'il-malik 'ala qadri 'l-walmati. zillat については List, XIII 326 参照。'ala qadr... は [註] 120 を看よ。なお、I. Rustah, 141 には、「彼らの一人が結婚したとき、王は彼らから馬を一頭づつ取る (wa-idha tazawwaja 'l-rajulu min-hum akhdha 'l-malik min-hum dabbatan dabbatan)」とある。

243) sakhrakh. suqraḥ, saḥraḥ に同じ ([ZV], 60-61 n. 3)。[K], 211 n. 515 参照。

244) [Y], I 727 には「彼らのところでは、油脂類といえど魚油しかない。従って、彼らはそれをオリーブ油、ゴマ油の代用としている。それが原因で彼らは穢らしい (zifrun) のである」とある。zifrun は〈臭い人〉の意か。

245) 此処は写本の本文が甚だ判読し難いが、[ZV] 63 n. 1 は illa an yukuna ra'sa tisin fa-yu'anna min al-laḥmi (ただし、その肉が雄ヤギの頭内のときには、彼女達はその肉を食べさせられる) と考えた。訳文は [ZV] による。

246) qalnis (qalansuwa)。

247) min saghrin wa kabirin. 〈老いも若きも〉の意か。此処は [Q], 615 に引用されている。

248) [Y], I 727 には、「彼らの視線が彼にあるときには、彼らは帽子を脱ぐ (sa'ta yaqa'u nazaru-hum 'alay-hi ya'khdhuna qalnis-hum)」とある。

249) [AT] ([ZV], 63 n. 5) に、Bulghar 地方の先きには、異教の民が住む。そこでは王[の姿]を見たとき、人々は自分の帽子を殿 (baghal) の下に置く」とある。この一文は、[IF] に依るものと思われるが、ここでも [AT] は、別の地域 (ブルガールの先き) の風習と誤っている。[註] 159 及び 236 を看よ。[Q] 615 参照。

250) 以下につづくブルガール人がテント生活者であること、子の養育権、相続問題について



の記事は[Y]にない。なお、彼らがテント生活者であると記されていることは、農作物が課税の対象になっていなかったこと(註239を看よ)と併せて、当時のブルガールの生活形態を考える上での貴重な史料と言えよう。

251) *fi biṣṣi-hi* は[R], 113に従い、*fi hadni-hi*と改めた。[K], 213 n. 531の*fi biṣṣati-hi*(彼の役所)は採らない。

252) [Y], I, 727には*wa'l-sawā'iqū fi bilāli-him kathratun jiddan*(そして彼らの国では、実に雷が多い)とある。

253) *'ala bayt* [Y], I 727には*fi dāri abaci-him*とある。ここで使われている*bayt*は〈家〉の意ではなく、〈テント〉のことであろう。つまり先きの文に「彼らはずべてテント住いである(*kullu-hum fi qihabin*)」とあった。[Y]は、この点を考慮して、写本の本文に*bayt*とある箇所を、すべて意識的に*dār*、もしくは*mawqī'*と改めている。例えば写本の*hadha baytun maghdūbun*は、[Y], I 727では、*hadha mawdi'un maghdūbun*(ここは、呪われた場所である)とある。[註220を参照。

254) 写本の以下の文は、[AT] (ZV), 65 n. 2)に、「もしも某者が人を殺したとき、彼らはその者を *khalan* の樹木で造った箱の中に入れる。次にその箱を高い柱(*sutun*)にひき上げる。するとやがて寒さや暑さのためにその者は死んでしまう」とある。この文は[Y]にない。

255) *al-khadhank* [AT]には*khalan*とある。

256) 写本の*saba'kh*は、[ZV], text 29に従い、*shaba'ih*とする。併せて[ZV], 65 n. 1参照。

257) [Y], I 727は*wa-idha ra'aw rajulan*。[AT] (ZV), 66 n. 3)には、「彼らは、もし頭脳が明晰(*zrak*)で思慮深い人(*'aql*)に出逢うと、その者の首に縄をかけて、樹木に吊してしまふ。そして、「この者は、神の奴隷として通している(*khadmat khudāra shayad*)。従って彼は死ぬのだ」と言う」とあって、明らかに[IF]からの引用と考えられる。

258) *an yakuna bi-khadami rabbi-nā*。[Y], I 727には*an yakhduma rabba-nā*とある。

259) 以下のシンド人(*al-Sindi*)の語は、[Y]にない。

260) *wa-kāna khafīfan fahman*。

261) 写本では、*fi mubāzat(?) la-hum*と読めるが意味がとれない。

[ZV], 65 n. 6は、*fi majālāt la-hum*(彼らの遊牧地)と推しているが、本訳は[R], 113の*fi tijārat (tijārat) la-hum*に従って訳した。[K], 215 n. 545: *fi mujāzat la-hum*(彼らの道路に沿って)。写本に従えば、[K]訳が適当であるが、意味が十分につかめない。[D], 133 n. 4, [Cz], 241参照。

262) *rabbi-nā*。[註187を看よ。

263) [ZV], 66 n. 2によって*fa-nuwajjihū bi-hi*と読む。

264) [Y], I 727, [Q], 615に同文を載す。

265) *silah-hu*(彼の武器)は写本にない。[Y]と[Q]が共に記していることから考えて、おそらく脱落したのであろう。従って、訳文では補った。

266) 以上の箇所は、[Q]には、「そして、[彼らの]慣例の一つに以下のことがある。もしも武器を携帯したままで小便をしている者を見つげると、彼らはその者の武器、服や所有しているいっさいの物を没収する。彼らは、そのようなこと〔を行なうの〕は、当人の愚鈍・無知の極みだと考えているのである。一方、人が自分の武器を傍に置いて[放尿すれば]、それはその者の知性・教養の顕れだとして、その者を決して辱めたりはしない(*wa ḥamalu dhalika 'ala jabli-hi wa qillati dirayati-hi wa man ja'ala silah-hu nahyatun ḥamalu dhalika 'ala dirayati-hi wa ma'arifat-hi wa-lam yata'arraḡu la-hu*)」とある。写本及び[Y]にない記事が見られるのは、おそらくは[Q]自身に依る挿入であろう。

267) *bi-wajh wa-la sabab*。[註394, 401参照。

268) 本文に次いで[Q], 615には、「つまり彼らに依ると、私通は最大の罪悪だとされているのである(*wa'l-zina 'inda-hum min a'gami 'l-jarā'im*)」と挿入がある。おそらく[Q]は、[IF]のグズ・トルコ族について説明した*wa amru 'l-liwaḡi 'inda-hum 'aṭmun jiddan*(彼らグズ・トルコの間では、男色行爲は、最大の罪悪とされている)とある文を誤って此処に挿入したものと考えられる。

269) *fi siḡat*(水浴の際)は写本にない。[Y], II 727によって補った。[Q], 615には、「(彼らの)男と女は、河におりて、裸になって水浴する(*yanzluna fi al-nahri wa-yaghṣuluna 'urṭan*)」のを私は見た」とある。

270) 此処に続く本文 § 15~§17の部分は、[Y]にない。

271) *ahl al-bayt* [K], 217 n. 556参照。

272) 写本の*ila štra(?)*は、[D], 135に依って*in štra*と改める。[C], 107 n. 246は*law štra*とする。

273) 此処は、*nahr 'Ail taḥw(?) al-fars*とあって判読困難であるが、[ZV], text 31に依って、*nahr 'Ail (lit) naḥwa 'l-farsakh*と改めた。

274) *mawqī' suq* [Cz], 221~222に依ると、この場所が後のブルガール国の都ブルガール(*madinat al-Bulghar*)の前身である、と。《サカーリパ国について》の記載の中で[IF]は*madina (町)*という言葉を一度も用いていない。[註253参照。

275) 以下に続くグズ・マゴグ(*Yā'juj wa Ma'juj*)の逆語は、[Y], I 112-113 (lit) 及び[AT] (ZV), 69 n. 3)にはほぼ同文を載す。

276) [Y], I 112は、「lit 河、そこはわれわれとの隣り1日である」なる説明文を入れている。[IF]に拠るものとは考えられないので、訳文では省いた。

277) 写本には、*wa hadha 'l-nahru qad madda wa-ṭafa ma'u-hu fa-lam ash'ur yawman illa wa-qad wafant jamā'atun min al-tujjari*とあるが、[Y], I 112の*wa-kāna hadha 'l-nahru qad madda wa ṭagha ma'u-hu fa-lam ash'ur illa wa-qad wafant jamā'atun*



- fa-qalū……に依った。[Cz], 241-2, [K], 219 n. 568 参照。
- 278) 此処は [C], 108 n. 251 が判読したように *fafa 'ala 'l-ma'* とした。[Y], I 112 に *fafa 'ala 'l-ma'* とある。
- 279) *kāna min ummatin bi-qurbīn min-nā*. [Y], I 112: *kāna min ummatin taqrubu minnā*.
- 280) *fa-idhā ana bi'l-rajūli*. [註] 226 を看よ。
- 281) *ka-akhar mā yakūnu min al-quḍuri*.
- 282) *makāni* (私の場所)。[ZV], 72 n. 2 は、これを *orda*, *yurd* の意に解している。
- 283) 此処の説明 (以下の3行) は、[Y] がない。
- 284) *mithlu 'l-bahā'im*. [Y], I 113 には *wa-anna-hum qawmun ka'l-bahā'imni 'l-hamlāt 'urūn hufātun* (そして彼らは、うろつき歩く牛馬に似た人々であり、裸、素足である) とある。
- 285) 写本は不明確であるが、*fa-yakhtabiru min……*と読んだ。[Y], I 113 には *fa-yajtuza* (刈りとる) とある。[D], 138: *fa-yabzuza* (切りこむ)。
- 286) 此処の写本は欠損している。*hajāt-hum* (彼らの必要) は、[Y], I 113 に従い補う。
- 287) *waqat fi 'l-baḥr*. [Y], I 113 には *'adat ila 'l-baḥr* (海に帰る) とある。
- 288) *al-sudd*.
- 289) [Y], I 113 には、此処は次の様にある。「アッラーフが彼らを放逐せんと欲せられたとき、魚は彼らから離れ、海は干上がり、われわれと彼らとの間にあった陸地は開かれた (fa-idhā arāda 'l-lahu ikhraja-hum inqat'a 'l-samaku 'an-hum wa naḍaba 'l-baḥru wa nfaṭaha 'l-suddu 'l-ladhi bayna-nā wa bayna-hum)」なお、Abu Ḥamid, 18-19 が *Wisu* の北に住む *Yura* 族の漁法として説明した一文は、写本の本文の *ゴク・マ* ゴクの記事とほとんど一致しており、明らかに両者の知識には共通の系統関係が認められる。即ち Abu Ḥamid には、「……そこで彼らが剣を海に投げた時、アッラーフは、彼らのために大山のような魚を海に放たれた。……しかし時として、海水が増加すると、その魚達は軽くなつて海にもどる。そのときにはすでに彼らの100,000の家に魚とたくさんのその肉で満ちている (fa-idhā alqau 'l-sayūfa akhraja 'l-lahu la-hum fi 'l-baḥri samakatan mithla 'l-jabali 'l-tatmi…… wa-rubbamā yakthuru mā'u 'l-baḥri wa takhiffu tilka 'l-samakatu fa-tarj'u ila 'l-baḥri wa-qad mala'at mi'utu alfi bayn wa akthuru min laḥmi-hā)」とある。
- 290) [Y], I 113 には、「さらに王は次の様に語った。『その男は私のところに暫く居たが、その後、彼は胸を病んだのが原因で死んだ ('aliqat bi-hi 'illaun fi naḥri-hi fa-māta bi-hā)』。私は出かけて行き、彼の骨を見たが、実に驚くべきものであった」とあって、甚だ簡略に記しているが、一部は写本の本文と異っている。
- 291) 写本の *fa-qadafa-ni(?)* *ila shajaratin* は *fa-qaddamant ila shajaratin* に改めなければならぬ。[K], 221 n. 591 参照。
- 292) 写本 fol. 208 b. 7 行目後半部は磨滅していて、復原することが難しい。[ZV], text 33

- は、[AT] に見る相当箇所 *ar-i dirakht wai-ra ddam ofiad* (ある樹木の下に、それ  
が落ちているのを私は見た)に基いて、*suqat 'atma-hu* と復原を試みた。訳文は [ZV]  
に依っている。
- 293) *al-qatir*. [ZV], 73 n. 4 の *qatiz* (Hohlmaß) とするは疑問である。
- 294) 以下は、[Y], [Q] には見られない。
- 295) 写本の *Jawshir* は、*Jawshiz* とする。
- 296) 写本には、*Suwan* とある。*Iṣṣakht*, 255 の *Suwar* (Suwar), Abu Ḥamid, 5 の *Suwar*  
に同じ。[ZV], 74 n. 2 参照。
- 297) *qawm*.
- 298) *fiqayuni*.
- 299) 此処は難解である。[ZV], 75 n. 1 に依ると、*fiqat ma'a khatani-hi* (王の婿と共にあ  
る愛) となる。[K], 223 n. 603 は、*fiqat ma'a khissatin* と読んで、〈下層民と共に  
ある愛〉と訳した。*ma'a khissatin* を読めば、蔵く文の *wa kāna qad tumallaka*  
*'alay-him* の主語が明らかでなくなる。I. Rustah, と H-ʿA, 194 は、ブルガール国の  
3つのクラン (*thalathat asnaf*) として、*Barṣula* (H-ʿA: *Bahḍula*, *Barchula*),  
*Asghal* (H-ʿA: *Ashkil*), *Bulkar* を挙げている。*Asghal* (*Ashkil*) は、写本の本文の  
*Askal* ([註] 302 参照) *Bulkar* は *Bulghar*, *Barṣula* は *Wayragh* にそれぞれ対応す  
る、と考えられる。従って、此処の写本は、*asnaf* の単数 *snaf* を用いて、*fiqat ma'a*  
*snaf-i-hi* と改めるのが適当であろう。なお、訳文では、〈王族の一人〉と置いた。H-ʿA  
では、ブルガール国の記載は、誤って《*Burfas* の説明》の中に挿入されている (text 194)  
ので注意が必要。
- 300) *dawlat umir al-mu'minin*.
- 301) Abu Ḥamid は、*Suwar* を *fi-hi* (*fi balad al-Bulghar*) *ummatun yuqalu la-hum*  
*ablu Suwar* と説明していることから、[ZV], text 33 が推したように、*hadhihi 'l-um-*  
*matu qad qilladant-ni fa man……* と復原した。なお [K], 224 n. 605 は、*hadha 'l-*  
*amru qad qilladant-ni* (このことは、神が私にお委ねになられた責なのだ) と改  
めている。umma は、〈ブルガール国民全体〉を言うのであろう。
- 302) I. Rustah, 141 が、ブルガール国の3つのクランの一つとして記している *Asghal*, *マ*  
*ジャー* (*al-Majghiriyat*) 国案に見る *Askal* (*bilad Askal*) は、いづれも同名。
- 303) 写本には一語に相当の脱字があるが不明。[ZV], text 33 は *hawla-hu shajaratun yanhutu*  
(その周囲には樹木が繁る) と判読。
- 304) *la ya'tiqū fi'l-dabḥati bi-wajhin wa la sabābin*. この表現は、文中で幾々見られる。  
*la malwi 'ala shay'in* ([註] 17), *'ala qadri……* ([註] 120) と共に [IF] の特色的筆  
法である。[註], 257, 401 を看よ。
- 305) *tayfurayit* (*tayfurayit*). Dozy, II. 48 参照。
- 306) *Birunt*, *al-Jawahir*, 208-210 参照。

## V ルース族について

### § 1. イブン・ファドラーンは語った。

当時<sup>320</sup>、商業取引のために渡来し、アティル河の岸辺に居を構えていたルース人を私は見た。

彼らはほとんど完全な体格 [の持主] を見たことはなかった。まるでナツメ樹のように [高い背]、赤褐色 [の肌]、クルタクもハフターンも着用せず、男達のある者は、ただ外套で体半分を覆うだけで<sup>321</sup>、片手は外に出していた。

fol. 210a 彼らは各自、斧、刀、ナイフを持ち、それら述べたすべてを [片時も] 身から離さない。彼らの刀は刃が広く、イフランジヤ Ifranja 風の溝がついている<sup>322</sup>。彼らのある一人のものの爪先から首にかけて、木や人物など [の模様] が描かれてあった<sup>323</sup>。

彼らの妻達は各自、自分の夫の資産や権勢に応じて、鉄、銀、銅もしくは金製の小箱を胸にしっかりと止めている<sup>324</sup>。その各小箱の中にも同じく胸に止めたナイフ付きのペンダントがある<sup>325</sup>。

彼達達の首には、金もしくは銀製のネックレスがいくつか掛けられている。それは、男が 10,000 ディルハムを得ると、自分の妻にネックレスを 1 箇つくってやり、20,000 ディルハムになれば、2 箇をつくるからであって、同様にして 10,000 ディルハムたまる毎に自分の妻のためにネックレスを 1 箇づつ殖していくのである。したがって、彼達達の中には、一人で沢山のネックレスを首につけている者も出てくる訳である<sup>326</sup>。

彼らにとっても、最も高価な装身具は、舶来の陶器製の緑のガラス玉<sup>327</sup>である。彼らは、その真珠 [を] 購入するため [に] 過大な金を支払っている<sup>328</sup>。つまり、彼らは、その真珠一つを 1 ディルハムで買って、自分の女のネックレス用につかうのである。

§ 2. 彼らは、アッラーフの創造されたものの中で最も不潔な人々であって、大便や小便の後始末は勿論のこと、性行為 [の後] にも体を洗おうとしない。ましてや食事のときに手を洗うことはなく、まるで彷徨い歩く野生ロバのようである<sup>329</sup>。

§ 3. 彼らは本国から渡来して<sup>330</sup>、船を アティル という大河<sup>331</sup> の畔に繋ぎ、その河畔に木造の大家屋を建てた。その各家の中には、10 乃至 20 人前後 [の人

307) 以上の箇所は、[AT] ([ZV], 77 n. 1) に、「そして Ahmad b. Faqlan は、次の様に語った。『私は、その玉のところにいった時、イエーメン産の瑪瑙に似た 3 個の大珠を見た。彼が私に説明してくれたところによると、それは犀の角で作ったものである。また、その角を使って人々は、飾帯を造り、王侯達がそれを高い値で買上げる。それ [の動物] は khulanj の樹林の中をうろついている、犀に乗った人をその角で襲う。Burtayil 島には、それに類似した獣 (jaww) が居る (草を食う)。人々は以下のような理由でその角を非常に高価な値で取引する。つまり、それを真二つに切ってみると、その中から人間、鳥、ライオン、あるいは魚と言った模様があらわれてくるのであるから。そして、もしその角の底部 (zamin-i sarw) が白色であるときには、[出てくる模様の色は] 黒ではない。[反対に] その角の元の部分 (asl-i sarw) が黒色であると、[出てくる模様の色は] 白くはならない」とある。後半の部分は、[IF] に依った引用とは考え難い。

308) 以下の文 (サカーリパ国の説明の最後まで) は、[Y], [Q] に見られない。マシェヘッド本の最も価値ある箇所と言えよう。

309) 写本には bi-ha とある。[Cz], 242 に依って、rubama と改めた。

310) al-qawlanj は aylawsh に同じ。Dozy, I 46 参照。

311) 写本は、wa-idha mar'at al-Khuwārizmiya と読めるが、理解し難い。[ZV], 78 n. 2 は、wa la-hu imra'atun Khuwārizmiyatun と改め、訳文は、これに依っている。[D], 143 は aw zawju 'l-mar'at 'l-Khuwārizmiya (もしくはホラズム生れの妻の夫……) と推した。

312) 写本には bayna bayna とあるが、[K], 231-1 n. 635 による wa bayna yaday-hi mitradun が正しい。[ZV], 78-9 n. 3 参照。

313) al-'ajalat.

314) labd. 〔墓の中につくった遺体を安置する洞穴〕の意。Dozy, II 973 参照。

315) yajūzu (?) は yajūna と改める。

316) ahrar (hurt). [註] 408 を看よ。

317) 写本の bi-tilka 'l-sammur (その黒貂皮) は、[ZV] 79, n. 3 の推定通り、julud sum-mur madfurat (燃った黒貂皮) の意である。[R], 118 と [D], 144 は bi-tilka 'l-suyūr (sayr: ペルト) と改めたが依るべきではない。

318) 次のように写本には一語に相当する空白が見られるが不明。an yunshubūna (yunshubū) ... bi-bahī qubbatī-hi.

319) hadha idha kana min al-ru'asā'i fa-amma 'l-'ammāt.

320) kull baytin fi mamlakati-hi.

321) ghayr-hum min s'iri 'l-ajnas.

322) 写本の冒頭箇所にも記されているように、ブルガール王がマクダード・カリフに政治、経済的援助を求めた理由がここで明確に語られている。

323) la miqdār la-hu.

324) dawlat al-Islām.

325) muqbil. Dozy, II 305 に依ると prospère の意。

々」が集まることが出来、各自が盛れる席が備えてある。また、彼らと一緒に商人  
〔に売る予定〕の美しい女奴隷が居て、仲間達<sup>3383</sup>が傍観する前で、その女奴隷と交  
わる者もいる。彼らの一団は、以上のようにして互いに顔をつき合せて集まってい  
ることゝある。商人がそこを訪れて、彼らの一人の〔所有する〕女奴隷を買うこ  
とも<sup>3393</sup>ある。〔商人が女奴隷を買うために入ってきた時〕その女と交わっているの  
を見られても、彼らは心ゆくまで思いを遂げた後<sup>3403</sup>でなければ、女から離れない。

毎日女がさざ彼らが行うことは、非常に汚れた不潔極まる水で彼らの顔と頭を洗  
うことである。つまり、毎日、朝になると、水の入った大盥<sup>3413</sup>を持った女奴隷が出  
て来て、先ず自分の主人にそれを差出す。すると彼は、その盥の中で自分の手と顔  
を洗い、さらに髪毛を洗い<sup>3423</sup>、髪を梳く。次いで鼻をかみ、唾を吐くなど、その水  
を汚すだけ汚してしまふ<sup>3433</sup>。主人が行うべきことをすべて為終えんと、女奴隷は、  
その盥を主人と隣席している人に持って行く。すると、その人も先きに主人が行っ  
たと同じことを行う。〔その人がすべてを終えんと〕女奴隷は、一人一人順次にそ  
の盥を廻し、ついには家中の者すべてに一巡する。しかもその間、各自みな同じ盥  
の中で鼻をかみ、唾を吐き、顔と髪毛を洗うのである。

fol. 210b

§ 4. 彼らルーヌ人の船がその〔アティル河畔の〕港に<sup>3443</sup>着くと、早速、各自バ  
ン、肉、玉葱、乳や酒を持って船を降り、地面に立てられた長い棒杭のある場所に  
赴く。その棒杭には、人間に似た顔が〔彫られ〕、その棒杭の周囲には小像があり、  
さらにその像の背後には土中に立てられた数本の長い棒杭がある。

彼らは、その一番大きな像の前に進み出て平伏し、

「おお、わが神よ！ 私は斯程の女奴隷と斯程の黒貂の毛皮を持って、遠方の  
国から参りました」

と言って、持って来た全商品を数え上げる。つづいて、

「ときに私は、あなた様にこの贈物を持って参ったのです」

と言ひ<sup>3453</sup>、その棒杭の前に<sup>3463</sup>持ち来たるものを置き、

「つきましては、どうぞ沢山のディナールとディルハム貨幣を持った商人を私  
にお差向け下さい。そして私の望み通りのものをすべて買い、私の言い値〔と  
相手の値との食違ひ〕でいざこざが起りませぬようにお願いいたします」

と言ってから立去る。

商売がうまく行かず、滞在日数が長引くと再び2回、3回と〔別の〕贈物を持っ  
て行く。それでも尚、思い通りに行かない場合には、小像一つ一つに贈物を持って

行き、とりなしを折願する。つまり、

「これらの方々は、私達の神の妻であり、その娘、息子達でありましょう」  
と言って、なおもその像一つ一つに請願し、とりなしを求め、像の前で跪拝をつづ  
けるのである。かくした結果、商売が順当に進行し、品物が売れると、

「わが神は、私の願いを叶えて下さいます。つきましては、お礼をしなければ  
なりません」

と言って、数匹の羊、もしくは牛を用意して殺す。そして肉の一部を〔皿に入れて〕  
献納し、残りの肉を持ってきて、それを例の一番大きな棒杭とそれとをとり囲む小像  
の前に投げる。また牛、もしくは羊の頭を地面に打込んだ例の棒杭に引掛けてお  
く<sup>3473</sup>。

夜になり、犬（狼）が来てそれを全部平らげてしまうと、〔次の日の朝〕になって、  
その供物を〕奉げた人は、

「私の御供物を〔すっかり〕お食べになられたのだから、きつとわが神は、私  
にご満足されたでしょう」  
と言う。

§ 5. もし彼らの中に病人が出ると、彼らのところから離れた一郭の地に、その  
病人の為のテントを張って、その中にぶち込んでおく<sup>3483</sup>。そして、その人はいくら  
かのパンと水を持たせるだけで、決して近づいて話かけをせず、何日もの間、  
見舞うことすらしない<sup>3493</sup>。

とくに、その病人が貧乏人とか奴隷<sup>3503</sup>であれば、なおさらである。したがって、  
もし病人の病が回復すれば、自ら立上って皆の居る所に帰ることが出来るが、その  
まま死んでしまうと、彼らは、その死体を焼く。  
fol. 211a

一方、奴隷であればそのまま放置され、やがて犬や食肉鳥の餌になってしま  
う。

もし彼らが泥棒や強盗を捕えたとき、その者を大木のあるところに連れて行き、  
丈夫な縄でその首を縛って木に吊るす<sup>3513</sup>。そして、風や雨によって、ばらばらにな  
るまで、そのまま吊るされる<sup>3523</sup>。

彼らの首長が死亡した場合、彼らは種々のこと——その一番簡単なものは、火葬  
である——を行うと<sup>3533</sup>、ある者が私に話してくれた。私は<sup>3543</sup>、予々その点をもっ  
と詳しく知りたいたいと思っていた。かく思っていたとき、彼らの内のある身分の高い  
人が死んだということを耳にした<sup>3553</sup>。



すると彼らは、彼（遺体）を「一ます」墓に安置して、10日の間、その墓におお  
いを被せておく。その間、彼らは彼の衣服を裁断したり、縫い合せたりする。

なお、「死んだ者が」貧乏人であれば、小型の船を造って、その中に彼（遺体）  
を入れて、火葬に附す。一方、金持の場合は、その者の財産を一つに取纏めて3等  
分し、その3分の1を親族に<sup>3400</sup>、3分の1を彼（死者）の衣服をつくるために、残  
りの3分の1を酒を造るのに使う<sup>3401</sup>。その酒は、死んだ者の女奴隷が自ら命を絶  
って、主人と一緒に火葬に附される当日に飲むためのものである。【火葬の当日に  
は】彼らは昼夜に渡って酒<sup>3402</sup>を浴びる程盛んに飲み続け、時には【酩酊の余りに】  
酒盃を片手に死ぬ者も出るのである。

なお【彼らの】首長が死んだときには、親族達は、彼の女奴隷や下僕達に向って、  
「おまえ達の中で、彼と一緒に死に死ぬ者は誰か」  
とたづねる。すると、彼らの一人が、

「私です」

と答える。一度、そのように答えてしまうと、絶対にその言葉を取り消すことは許さ  
れず、むしろ義務として、その人に負わされることになる。したがって、たとえ  
【前言を】取消してもいいかと思っても駄目である。普通、それを行うのは、女奴  
隷達である。

さで、先きに一言し人が死んだとき、早速、彼ら【親族の者達】は、彼の女  
奴隷に、

「彼と一緒に死に死ぬ者は誰か」

と聞いた。すると、女奴隷の一人が、

「私です」

と答えた<sup>3400</sup>。すると、その女は、常に行動を共にし<sup>3401</sup>、果ては両手・足を洗うに  
至るまでの一切の面倒を見てくれる2人の女奴隷<sup>3402</sup>に預けられた。

一方、彼ら（親族達）は、彼（死者）【を包むため】の衣服を裁ったり、必要と  
なるものを整えるなど彼に関する一切の準備を始めた。

その間、【死を申出た】女奴隷は、毎日、享楽と歓喜にわれを忘れて酒を飲み、  
歌をうたっていた。

彼と女奴隷とを火葬に附す当日になった時、私は、彼の船の浮ぶ河に出かけた<sup>3403</sup>。  
すると、既にその船は、【陸上に】移され、白樺<sup>3404</sup>の樺杭やその他の樹木の樺の支  
え柱4本で固定されてあった。しかも柱の周囲には樺杭で造った大きな足場<sup>3405</sup>に  
似たものが取付けられており、船は、丁度その樺杭【の足場】の上に乗るように曳

き上げられてあった。

彼ら<sup>3406</sup>は右左往しながら、訳の分からない言葉をしゅべりはじめた。一方、  
彼（遺体）は、まだ【版の】墓地の中に置かれ、未だそこから運び出されてはいな  
かった。次に台座が竊らされて、ルーム製の錦織の敷ぶとんとルーム製の 錦織の  
枕<sup>3407</sup>をその台座にくるめて、船の上に置かれた。

fol. 211b 次に 死の天使 と呼ばれる一人の老婆が登場して、今述べた敷物を台座の上に敷い  
た。死者の衣服を縫い、【葬式に必要なもの】一切を整える指揮をするのは他なら  
ず彼女であり、且つあの女奴隷を殺すのも彼女の役目なのである。私が思うに、彼  
女は魔法使<sup>3408</sup>であって、肥った陰険な人であった。

彼らは、彼（遺体）【の仮安置】の墓に来て、椿木の上の泥を取除き、板をはず  
して【遺体を取出し】、死者を包む布（死衣）<sup>3409</sup>に彼を移した。見たところ、既に彼  
は、その国の寒さのために黒くなっていた。先きに、その墓の中に酒、果実とタン  
プール<sup>3410</sup>を供えて置いていたのであるが、それら全部を取り出して見ると、ただ色【の  
変化】の点を除けば、いづれも腐敗しておらず、ほとんど変化したところはないかっ  
た<sup>3411</sup>。

彼らは、彼にズボン、ゲートル<sup>3412</sup>、長靴、クルタクと金ボタン付きの錦織のハフ  
ターンを着せ、頭には、黒貂皮つきの錦織の帽子を被せた。こうして彼を運び出し、  
船の上にあるテント<sup>3413</sup>に移して、敷ぶとんの上に座らせ、枕に凭せかけた。また酒、  
果実、芳香性のある果物<sup>3414</sup>を齎らして、彼に供えた。

次に、彼らは、パン、肉、玉葱<sup>3415</sup>を齎らし、彼の前に放り投げた。また一匹の犬  
を連れて来て、真二つに切り、それを船内に投げ入れた。

さらに彼の武器すべてを齎らして、彼の傍に置いた。2頭の馬をつれてきて、汗  
が出る程駆けさせた後<sup>3416</sup>、その2頭を刀で斬り、肉を船内に投げた。牝牛を2頭連  
れてきて、これも同じく斬って、船内に投入された。また雌鶏と雄鶏を齎らして殺し、  
船の中に投入された。

一方、殺されることを自ら願出たあの女奴隷は、あちらこちらに行きながら、彼  
ら【親族】の各テント<sup>3417</sup>を訪れた。つまり、そのテントの主人と交るためである。

【彼女がテントの中に入ると】その主人は、彼女に、

「汝のご主人にこう言いなさい。『私がこのように行うのも、ただただ汝への  
親愛の気持からなのです』、と」  
と言った<sup>3418</sup>。

金曜日の午後の折りの時刻（4時）になった時、彼らは、先きに造っておいた門の

棒組<sup>390</sup>に似た所に例の女奴隷を連れて行った。彼女は、両足を男達の章の上に置いて、その棒組に身をのりだし、何か言葉を喋った。すると、男達は、彼女をおろした<sup>390</sup>。2度目にも彼女を持上げて、1度目に行ったと同じことをした後、下した。3度目、彼女は持上げられると、先きに2度行っただと同様のことをおこなった。

その後、一羽の雌鶏が差出されると、彼女は、その頭を切って、傍に置いた。すると彼らは、その雌鶏を掴んで船の中に投入した。私は、通訳に彼女が何をしていたのかとたづねた。すると通訳は、

「彼女は、最初に持上げられた時、"おお見えませう"<sup>391</sup>。わが父と母が、と言ったのです。そして2度目には、"おお見えませう。わが先祖代々の方々がお盛りになられているのが、"と言ひ、3度目には、"おお見えませう。わが主人は天国にお盛りになられている。天国は美しく、緑なり。あの人は、人々や従僕達とお盛りにおられ、私をお呼びになられている。ですからどうぞあの人のものに私を絡におられ、私をお呼びになられている。ですからどうぞあの人のものに私を連れて行って下さい、"と言ったのです」

と答えた。その後、彼女は彼女を連れて、船の方に行った。彼女は、それまで身につけていた2箇の腕輪を外して、死の天使と呼ばれるあの「老」女に渡した。彼女を殺すのは、他ならずその女なのである。また、同じく身につけていた2箇の足首飾りを取って、それまで世話をしてくれた2人の女奴隷——実は死の天使というあの女の娘なのである——に与えた。

次に彼らは、彼女を船に乗せたが、未だあのテントには入れなかった。次いで、楯と棒を持った男達が来て、彼女に一杯の酒を差出した。すると彼女は、盃を前にして、鼻唄まじりにその酒を飲んだ<sup>392</sup>。通訳は私に、

「彼女は、あのようにして仲間達に別れの挨拶をしているのです」と説明した。続いて、もう一杯の酒盃が出された。彼女は、それを受取ると、長い間、歌を唄いつづけていた。一方、老婆は、その酒を彼女に無理矢理に飲ませて、彼女の杯を納めたテントに入れようとした。私が見ると、彼女は、既に気を乱し<sup>393</sup>、むしろ進んでテントに入ることを望み、頭を船から半分テントの中に入れた<sup>394</sup>。と、老婆は、彼女の頭を掴んで、テントの中に押込んだ。かくして、彼女は、老婆と一緒にその中に入ってしまった。

一方、男達は楯で楯を打鳴りはじめた。彼女の悲鳴が聞えないようにとの配慮からである。つまり他の女奴隷達が「その悲鳴を聞いて」衰れに思っ、自分の主人と一緒に死にたい気持をおこさないともかぎらないからである。

6人の男はテントの中に入って、代る代るその女奴隷と交わった後、再び彼女の

夫(遺体)の傍で<sup>395</sup>交わった。次いで彼女の両足を2人の男が、両手を「別の」2人の男が掴むと、死の天使と呼ばれる老婆は、彼女の首に交織りの縄を掛け、[他の]2人にその縄を引くようにと促がした。次いで、老婆は刃幅の広い短剣<sup>396</sup>を持って彼女に近づき、その胸を所々突刺しては抜きはじめた。その間、2人の男は、彼女の首を縄で締めつけた。かくして彼女は死んだ。殺された女奴隷がその主人の胸に置かれると<sup>397</sup>、その死者に一番近親の者<sup>398</sup>が出てきて、「点火用の」棒木を手持に持って火をつけた。彼は船の方に背を向け、顔を人々の方に向けて、丁度、後向きの恰好で歩いて行った。片手にその火のついた棒木を、もう一方の手は、自分の尻に<sup>399</sup>置き、裸のままの姿で船の下に置いた棒木に火を放った。次に棒木、枝木と先端に火のついた「点火」棒を手にした人達が現われた。彼らは、それらを「船の下に置いた」棒木に投げた。火は先ず枝木につき、次いで船に、そしてあの男(死者)、女奴隷、その他すべての物が入っているテントへと移って行った。

やがて恐ろしい程の大風が起って、炎は一段と強まり、火の勢いは激しさを増していった。

fol. 212b 私のそばには、一人のルース人が居た。同行の通訳と何か話合っているのを聞いて、私は、その通訳に、

「何んと言っているのだ」

とたづねた。すると彼は、

「つまり、彼は"お前達 アラブの連中はなんて馬鹿なんだろう、"と言っていました」

と答えたので、私は、

「それは何故だ」

と反問すると<sup>390</sup>、彼は次の様に説明した<sup>391</sup>。

「あなた様方は、たとえ最も愛し、最も尊敬している人であっても、[その者が死んでしまえば]土の中にぶち込んでしまふ。泥、虫けらやみみずがその人を食ってしまふにもかかわらず。一方、私達と言え、火で一瞬の内に焼いてしまふので、[死者は]あつと言つ間に天国に行けるのです」<sup>392</sup>

なおも私は、その訳をたづねると、彼は、

「その「死」者への神の御慈愛によって、神は風を遣わされたのです。一瞬のうちにもその人を運び去るために」

と説明した。事実、船、枝木、女奴隷とその主人が完全に灰になるまでは、ほんの一瞬の出来事であった。[すべてが燃えた後]彼らは、河から引上げた船のあった

る〔496〕 場所に円型の丘に似たものをつくり、その丘の真中には白樺の大木<sup>390</sup>を植えた。そして、その木に〔死んだ〕人の名前とルース王の名とを刻んだ。その後、彼らは〔その場所から〕立去った<sup>391</sup>。

#### § 6. イブン・フィードラーンは語った。

ルース王<sup>392</sup>の慣習には次のものがある。ルース王の宮殿には、王の近衛長と腹心の者達<sup>393</sup> 400 人が王と一緒に居る。彼らは、王と生死を共にし<sup>397</sup>、王の為には彼らの身を犠牲にする。

彼ら各自には一人の女奴隷がいて、その人に仕え、髪を洗い、食物・飲物を用意する。また同衾のための別の女奴隷がいる。それら 400 人の者達は、常に王の玉座のもとに傳えている。彼の玉座は、高価な宝石をちりばめた大きなものである。その玉座の傍には、王と同衾する女奴隷 40 人が王と一緒に座っている。王は、先きに述べた家来達の居る前でその女の一人と交わることもある。

王は、玉座から決して降りることはなく、もしも用便を済めたいときには、盤の中にする。馬に乗りたい時には、彼の馬が玉座のところに連れて来られ、そこから乗って行くのである。馬から降りたいときも、丁度、玉座の上に来るように馬を御すのである<sup>398</sup>。

王は副王をもち、副王は軍隊を統率して敵を攻撃し、また部民<sup>399</sup> に対しては王を代行する権利を有している<sup>400</sup>。

#### 註

325) 此処に続く文は、[Y], II 834~840 (Rus), [Q], 586 (Bilad al-Rus); [AT]; [AR] にほぼ同文を見る。[Q] は、〈Rus 国〉項目の大部分を [IF] に依って記す。しかし現存のマシュハド写本と一部異同が認められる。すなわちルース人の性格について、[Q] は、「Ahmad b. Fadlan は、彼の報告書 (risalat-hu) の中で、次の様子のべている。

「私は、ルース人を見た。彼らは、Atil 河を伝って、彼らの商品を持ってきた (wafu bi-tijaratihim 'ala nahri Atil)。私は、彼ら程完全 (強靱) な体格の者達を今までに見たことはなかった。まるでナツメ樹の如く、褐色と白色の肌をしていて、彼らは法律をもち、他のトルコ族とは異った言語である。実に彼らは淫らであって、不潔なことに全く無頓着といった如く、アッラーフの創造されたものの中でも、最も怪奇な人々である」 (al-hum shari'atun wa lughatun mukhalifatun li-sa'iri 'l-Turki lakinna-hum andaru khalqi 'l-lahi la yatazzafuna wa-la yabtarzuna 'an al-najisati)」と記している。これらの差異は、[Q] が [IF] の本文に基づきながらも、一部加筆したためと考えられる。

327) 此箇所の写本は空白であり、[Y], II 834 に依って、wa-lakin yalbasa と補う。

328) 写本には、sa'f'il mushafatbat ifranjiyat とある。mushafatbat は、Birtuni, Jawahir, 253 が、al-mushafatbat min al-suyufi alladhi fi-hi tara'iqu ka'l-jadawili ma'mulat と説明しているように、〈剣の脊に刻んだ溝〉の意。[ZV], 82. n. 5 参照。

329) 此処の写本は、min haddi zufri 'l-wahidi min-hum ila 'unqi-hi mabdaru shajirin wa suwarin wa 'ghayri dhalika とあって、意味がつかみにくい。字義通りに訳せば、「彼らの一人の爪の先端から首までは、[緑色に彩色されており] 木、像、その他 [の紋] のあらわれがある」となる。当然、この文は刺青の風習を描写したと解される。[ZV], 83 n. 1 参照。

330) haqqat mashdudat (しっかりとめられたリング) は、[Y], II 835 に従い、haqqat mashdudat と改める。

331) [AT] ([K], 153) には、次の様にある。「女達はみなその胸に金、もしくは木で造った箱を付けている。各箱は、円い型につくられてある。」また [AR] ([ZV], 84 n. 1, [K], 154) には、さらに詳しく、「この地方の女達は、彼らの社会的地位と財産の程度に応じて金、銀や木で箱を造る。そして彼女達はそれを乳房の下に子供の時から付けはじめるので、その位置に箱は固着し、乳は決して大きくならないのである」とあって、写本の本文に見られない記事を含んでいる。

332) 写本には、bi-ma kana fi 'unqi 'l-wahidat とあるが、[Y], II 835 に依って、fa-rubbama kana fi 'unqi 'l-wahidat と改めた。

333) al-khanz al-akhdar min al-khazaf alladhi yakunu 'ala 'l-sufuni. [ZV], 84, n. 2 参照。Fahm, 5 及び 86-7 n. 40 は、此処を grünen Gasperlen von der Art, [C] 118-



9 は des perles de verre vertes de même fabrication que les objets en céramique que l'on trouve sur leurs bateaux とある。al-khazaf alladhi yukunu 'ala al-sufun は文字通り訳せば「船の上にある陶器」の意であるが、訳文通り al-khazaf alladhi yubmalu bi al-sufun (船によって運ばれた陶器) のことと考えられる。

334) yubayy'una fi-hi (そのことに関して契約する) は、[Y], II 835 に従い、yubalighuna fi-hi と改める。

335) ほぼ同文が本文の グズ・トルコ族の説明の中で見える。[註] 92 を看よ。

336) 写本には、yayzu min baladi-him とあるが、[Y], II 835 によって、yayj'una min baladi-him と改めるべきであろう。同じ誤りが箇所で見られる。[註] 315 を参照。

337) 写本には、一語の脱字がある。[Y], II 835 に拠って mahr (河) を補う。なお、アテイルは写本ではアーティル Atil と読める。

338) 写本の wa raqūq-hu yanzuru ilay-hi (彼の奴隷が彼を見る) は採らず、[Y], II 835 の wa rafiq-hu (彼の仲間) に依った。

339) [Y], II 835 にあるように rubba-ma の字を補う。

340) 此処は fa-la yazulu 'an-ha aw bi-ba'di arabī-hi とあって意味不明。[Y], II 835 の fa-la yozulu 'an-ha hatta yaqdiya arabu-hu を採る。

341) ghaq'at (?) は、[ZV], text 37 に依って qas'at とする。

342) 此処は、復原することが難しい。[Y], II 835 に依って補正すれば、訳文の通り shat'ra si-hi fa-yaghsiluh-hu となる。

343) 此処の写本には、数語の脱字が見られる。[Y], II 835 の引用に依って、wa-la yada'u shay'an min al-qadhari illa fi-la-hu と復原する。

344) al-marsa. おそらく前出の「Atil 河の岸辺に居を構えていた」とある「河畔の港」を指している。

345) [Y], II 836 に倣い min tijarat-hi [thumma yaqulu] wa [qad]... とカッコ内の字を補うべきであろう。

346) 写本には、bayna tilka 'l-khashabat (その樺枕の間に) とあるが、[Y], II 836 にあるように bayna yaday tilka 'l-khashabat (樺枕の間に) のことと思われる。訳文は、[Y] に依っている。

347) 牛や羊の頭飾を樺枕に引掛けておく語は、グズ・トルコ族の説明の中で記されている。[註] 192, 118, 348 を参照。

348) [arabu la-hu khaymatan] nahiyatan 'an-hum. カッコの箇所は、[Y], II 836 に依って復原した。なおオース人の病人に対する処置は、前出のグズ・トルコの場合 ([註] 92) とほとんど一致する。このように両部族に関する [IF] の記載が各所に於て類似していることは、[IF] の記述自体に混同があったため、と考えられる。従って史料として利用する際には、この点に十分留意する必要がある。[註] 118, 347 を参照のこと。

349) [bal la yata'haduna-hu] fi kulli ayyamin. カッコ内は写本の欠損、もしくは脱字の

部分。[Y], II 836 に依って補う。[K] 242 n. 734-5 参照。

350) qat'if aw mamlik.

351) [Y], II 836 に依って、wa-'allaqu [fi-ha wa-yabaq mu'allaqan] とカッコ内の字を復原。

352) hatta yanqat'i'a bi'l-riyahī wa'l-amfari. [D], 155 は、[Y], II 836 の引用に依って、hatta yanqat'i'a min al-makthi... (留まる内に、彼が風と雨によって粉々になるまで) と改めているが、これには従わない。なお同ような表現は、写本の文中に屢々見える。例えば yuqbu-hu 'l-mafaru wa'l-shamsu... hatta yubliya-hu 'l-riyahu (雨と太陽が彼にあたり……ついには、風塵に備すまで) など。

353) umul aqalla-ha 'l-harq.

354) 以下、初明に語られているルース人の葬儀の様子は、[IF] 自身がブルガル国に滞在する中、Atil 河畔で目撃した事実であって、彼がルース本国に旅行したことを示すものではない。しかし、彼は、人から伝え聞いた知識と直接経験した事実とを併せて記述しているために、屢々説明に重複が見られる。此処は [Y], II 836-40 (Rus), [AR] ([ZV], 89-90 n. 4, [K], 155-6) に見える。[AR] には、「彼らは、彼(死者)を 10 日間、[原] 墓の中に置く。そして彼の財産と金を 3 等分にして、その 1/3 を彼の娘と夫人のために、1/3 を死者を覆うために使う衣服に、さらに残りの 1/3 を酒 (sharab) の費用に使うのである。その酒は、10 日に渡って飲みつづけるものである。その間、彼らは盛んに饗宴を行ない(女と交わり)、音楽を奏で、唄っていた (saz minuwazand)。一方、彼と一緒にに絶死ぬことを自ら望んだ例の女奴隷は、その 10 日間、酒を飲んで陽気になり、頭から足のさきまで有らん限りの装身具と美しい衣服で身を着飾り、[男]の連中達に媚態を作って(身を献げて)は自らを慰めていた」とある。

355) kana yaqulu anna-hum (……と私に語っていた) とあるが、[Y], II 836 に従い、kana yaqulu li anna-hum (……と私に語る者があった) と改めた。

356) ahl-hu (ahl al-mawt).

357) yunabbidhuna bi-hi nabidhan. [Y], II 837 には、yasharuna bi-hi nabidhan (その金で酒を買入する) とある。

358) al-nabidh. [Y], II 837 は al-khamr と改める。

359) 此処で再び [IF] が目撃した事実が記され、これまでの説明がくりかえされている。[註] 354 を看よ。

360) fa-qala は、fa-qalat と改める。主語は、〈女奴隷〉である。

361) wa-takunani ma'a-ha baythu salakat.

362) jariyayani. 実際には奴隷ではなく、後述するように〈死の天使 (malak al-mawt) の娘〉である。

363) 写本には、ila 'l-nabī saftnatu-hu fi-hi とあるが、[Y], II 837 は、ila 'l-nabī alladhi fi-hi saftnatu-hu (船のある河べりに) と記す。

- 364) khashab al-khadhank. [Y], II 837 には khashab al-khalij とある。Frähn, 107-109 n. 111 参照。
- 365) mithl al-anabir 'l-kilār. [Y] II 837 には, mithl al-unasi 'l-kilār min al-khashabi (木製の大きな人間に似たもの)とある(Beyrouth 版 II, 81)。Dozy, I 39 によると anbar (anabir) は pont, éstage de navire の意, nibr (II 635) は du vieux bois dont on se sert pour allumer le feu である。[ZVI], 90 は, これを Schiffsverdecke, [C], 125 は echafaudage と訳した。前後の文意から判断して, <船のデッキ>の意ではなく, [C] が誤ったように<足場>もしくは<台>の意であろう。
- 366) 此処の写本(2行)は磨滅していて復原することができない。すべて[Y], II 837-8に復元した。
- 367) al-masānid (nusnad). Dozy, I 692 参照。<クッション>の意。
- 368) jawān bīrah. つまり, ベルシア語 jawān-i pīreh のこと。Dozy, I 229 (juwanabir), [ZVI], 91 n. 4 及び [K], 249 n. 781 参照。なお, [Y] II 837 は, 此処を hawwā' nawayyirāt (陰険な蛇使い)と改めている。
- 369) al-izar は<棺衣>の義。
- 370) fanbur. [K], 250 n. 788 は, <三枚連巻の一種>の意とした。
- 371) fa-idhā huwa lam yantīn wa-lam yataghayyar min-hu shay'un ghayra lawni-hi huwa <死者>とれば, 此処は, 「それらすべて(酒, 果実, テンブール)を取出した。なお, 死者は腐敗しておらず, その色の点をのぞけば, 全く変わったところはなかった」となる。
- 372) sarāwīl wa ran wa khuff.
- 373) qubbat. [註] 62 参照。
- 374) al-nyḥān は, <はっかの一種>と思われる。[K], 250 n. 796 及び Dozy, I 567 参照。
- 375) 同じ献納の品々は, 彼らの酋長繁昌を祈願する廟に供えられている。前出 68 頁参照。
- 376) thumma akhādhu dabbatayni fa-ajarru-humā ḥattā 'arīqatā.
- 377) [AR] に依ると, 戦族のテント(qubbat)は, 死者を納めたテントの周囲に張られた。[註] 378 を看よ。
- 378) [AR] は, <ルース國の説明>を全面的に [IF] に依っているにもかかわらず, 現存のマシュハド本及び[Y]のいづれにもない詳細な説明を行なっている。この点は, [Y]が, Irl 項目(1113)の中で, 「al-Muqtadir が Ibn Faḍlān をブルガールに派遣したとき(の彼(Ibn Faḍlān)の語は, 記録されて, 広く世間一般に知られている。私はその数種類の写本を見た (wa-qissatu Ibn Faḍlān wa infādhi 'l-Muqtadir la-hu ila Bulghar mudawwanatun ma'trufatun mashhuratun bi-aydi 'l-nāsi ra'aytu bi-ha 'iddaia nusakhin)」と記していることから考えて, [AR] は現存の写本とは全く別版本を利用したとも推測することができよう。しかし [AR] の引用の仕方は, [註] 159, 236, 249

で見たように, 決して厳密とは言えず, かなり安易に別の史料からの引用記事を総合している。[IF] の原文に記された場所とは異なった地域の説明文中に, その一部を挿入する例が屢々見られる。従って, 両本の差異から, 直ちに [AR] が [IF] の別版本を利用した, と判断してはならない。[Y] は, 数種類の写本を見たと記しているが, 彼の辞典編纂の際には, 一種類——明らかに現存するものと同じの写本——だけしか利用していない, と推すことができる。此処は, [AR] ([ZVI], 92 n. 8) には次の様にある。

「9日目, 彼らは船を河流の畔に引寄せ, 見守っていた。そして, その船の中央部に一つの大通のテント(gunbadh, kunbadh)を張り, そのテント(qubbat)を種々の織物で覆った。10日目, 彼らは死者を〔原墓地から〕そこ(船のテント)に運び来りて, 上塗したテントの中央部に納め, 多種類の花やバラをまいた。男女多数の人達が集まった。彼らは音楽を奏で, 歌を唄った(suzhā minuwāzand)。故人の仲間(親類)達は各自, 彼(死者)を納めたテントの周囲にテントを張った。例の女奴隷は, 身を着飾り, 故人の仲間達のテントに行った。すると先ず各テントの主人が彼女と交わり, それが終るとテントの主人は犬部で, 彼女の主人に自分は同僚の契り, 友情の恩恵を尽くしたのだと伝えてくれ, と言った。かくの如く, 彼女は全部のテントをたづねて〔先きに行つたと同じように〕, この主人と交りをつ結んだ。彼女がそれを〔すべて〕為終えんと, 彼らは犬を真二つに切つて船の中に投げた。また雄鶏の頭を切つて船の左右に投げた。」

379) malban albab. Frähn, 119-24, は<戸の張り出し幕>と訳した。Dozy, II 515, [D], 160 n. 1, [K], 252-3 n. 811 参照。

380) wa-asbafat 'alā dhalika 'l-malban wa-takallamat bi-kalāmīn la-ha fa anzal-ha とあるが, la-ha は, la-hu (門の枠組)に改める。

381) 此処以下の写本 fol. 211 b (下2行)~212 a は, 処々磨滅しているために復原困難。すべて[Y] II 838-9 に依つて補う。

382) fa-ghamat 'alay-hi wa sharbat-hu と読んだ。

383) wa-qad taballadat.

384) fa-udkharat ra'su-ha bayna-ha wa bayna 'l-safina.

385) 写本には ila janibi mawla-ha, [Y] II 839 は ila janibi mawla-ha 'l-mayyit(彼女の夫である死者の傍に)とある。

386) 写本では, wa-ma'a-ha jahī 'arīd al-nasī と読めるが, [Y], II 839 に依つて wa ma'a-ha khamīr 'arīd al-nasī と改めた。[ZVI], 95 n. 1 参照。

387) 写本には, ただ alladhī tabī'a 'l-safinātī thumma wafā 'l-nāsu とあるが, [Y], II 839 は, al-safinat wa thumma の間に min ba'adi mā waḍa'u 'l-jariyātā 'l-lati qatala-ha fa janbi mawla-ha という語句を挿入している。[Y] による増補かと思われるが, 原文は[Y]に従っている。

388) aqrab al-nās.

389) bab isti-hi.

- 390) [R] 125 の推定によって, qultu la-hu lina dhalika qila innak-kum と改めた。[Y], II 839; [K], 261 n. 881 参照。
- 391) [Y] II 839 には, さらに一つつけて thumma qabika qabkan mufrītan (それから彼は、大げさにげらげら笑った) とある。訳文には含めなかった。
- 392) yashbu と読めるが, [Y], II 840 に依って naṣabu と改める。
- 393) [Y], II 840 には khadhani, とある。
- 394) 以上の箇所は, [AR] には次の様に記されている。

「次に男の連中は、例の女奴隷 (kanizak) と交合した後、彼らの手を彼女の方に広げたと。すると彼女は足をその男連の手の掌に置き、[男に抱かれて] 船に登って行った。彼女の手に一羽の鳩が与えられると、彼女はその首をもぎ取って船の中に投入した。その後、彼女は一杯の酒 (sharab) を飲んで、数語言葉を喋った。それから3度に行き、数毎回、上述した男連の手の上に立った格好で、下へ降りて来て、再び船に登って行き、数語喋りして、彼女の父が入っているテントのところに行った。その後、彼女の夫の同輩6人は、各自テントの中に入って行き、故人の傍でその女と交った。このようにして友愛の契を果した後、彼らの宗教上の〈死の天使〉なる老婆が [テントの中に] 入った。老婆は、女奴隷とその夫 (死者) と並んで横にし、寝かせた。6人の男の中の2人が女奴隷の両足を、他の2人が彼女の両手を握んだ。すると老婆はロープを燃やして、彼女の頭にそれを巻きつけると、彼女の生命から霊が出ていくように一層強くその燃焼を燃るために、残る2人の男の手に縄を渡した」([ZV], 95 n. 2) さらに、「その女奴隷が殺された後、死者が一時の内に灰と化すようにと、彼らは彼らの [死んだ] 2人の友に火をつけ、同時に船の中に灰を放った。その瞬間に風がおこり、火の勢いは強くなって、灰を散らしてしまえば、その [焼かれた] 当人は、天国の住民になるのであるが、そうでない場合 [つまり風が充分におこらず灰が散らないとき]、彼らは、その亡き人の連より高まることを [神に] 祈願する。それは悪人に対しても同じように行なう。両人が争い、不和が続いている時、しかも、彼らの王がその2人を和解させることができないう時には、王は彼ら互いに刀を持たせて争わせ、闘った方が正しいと判断を下すのである」([ZV], 95 n. 4) とある。後半の部分は [IF] の本文にはない。

- 395) 此処は, [Y], II 840, [Q], 586, [AR] ([ZV], 98 n. 3) に同文を載す。[Q], 586 には「彼らの王の習慣には以下のことがある。王は、高く聳え立つ大宮殿に居り (fi qaṣrin raḥīm kabīrin) 彼と一緒に400人の腹心の者達 (khawāṣṣ-hu ahl al-thiqat) が彼の玉座の下にかしきついている。そして彼は寶石をちりばめた大きな玉座をもち、その玉座には同僚のための40人の女奴隷が彼と共にいる。彼はその家来達の居る前で彼女達の一人と交わることもある。彼は決してその玉座から降りることなく、もし彼が用便を済ませたいときには、盤がそこに置られる。またもし彼が馬に乗りたいたいと思うと、馬がその玉座の傍に連れてこられる。彼は、軍隊を統率し、部民の諸問題処理及び敵を攻撃したりする [任をもった] 副王 (khalfat) をもっている」とある。また, [AR] ([ZV], 98 n. 3)

には、「彼らの王は非常に高い城の中で生活を送っている。400人の軍人達が彼の [職務にあたり、王の玉座の下で寝る。この400人の男連は各自一人の女奴隷 (kanizak) をもっている。彼らの成者が望んだとき、その者は王の面前でその女奴隷と交わる。また王は、その同僚のために選ばれた400(40?) 人の侍妾 (ghariyat) をもつ。王は大きな宝石をちりばめた玉座 (tabt) を持ち、王の40人の侍妾と一緒にその玉座に座して、悦楽に専心している。屢々、王は本能が望むまま家来達 (ashab) の居る前で、彼女達と交わる。が、そのような行為を決して悪いことだと考えていない。彼らの王は、決してその玉座から下に降りることなく、もし彼が馬に乗りたいたいときには、馬がその玉座のもとに連れて来られる。すると彼は、玉座から直接、馬に乗り、馬を下りるときも、その玉座のところで馬をおろす。王は、女と交わり、酒を飲み、悦楽にふけること以外に何んの仕事も持たない。身分の高い人連は、彼のもとで好んで製革の仕事に従事しており、そのような劣等な仕事に対して何んのためらいの気持ちも持っていない。この国及び [その周辺] 地方 [で産する] の亜布 (kian) は Kyawh と呼ばれるその首都のものがとくに有名である。誰にでも知られたルースの有名な町は、一つは Chorsk, もう一つは Kharqah である。これらの文を比較すれば明らかのように、とくに [AR] の文とは、著しく相異する。おそらく [AR] 自身による補入であろう。故にこの箇所はとらない。

- 396) sanādīd aṣḥabi-hi wa ahl al-thiqatī.
- 397) yamutuna bi-mawī-hi wa-yuqaltuna dūna-hu.
- 398) ḥatta taiala dabbata-hu (彼がその馬を衰弱させるまで) と読めるが, [Y], II 840 に従って訳文通り ḥatta yakūna ruzulu-hu 'alay-hi と改めた。
- 399) ra'iyat.
- 400) [Y], II 840 は, Rus 項目の最後を、「以上は、私が Ibn Faḍlān の (Risālat) から逐語引用したものである。従って、彼が語った点での責任は、彼にある。アッラーフのみがその事実の真正さを御存じである。ところで、現在、彼ら (ルース人連) の一般の宗教は、キリスト教である」と言って、結んでいる。



## V ハザル国について

§ 1. イブン・フアドラーンは語った。

さて<sup>401</sup>、その名(称号)ハーカーン Khaqan なるハザルの王について言えば、彼は、神に近い聖なる状態で<sup>402</sup>、4 カ月に一度だけ姿を現わす。

一般に、彼のことを大ハーカーンと言ひ、彼の摂政をハーカーン・ベフ Khaqan-beh と言っている。軍隊の統率・指揮、国事の立案および施行、さらには征服事業・軍事遠征を奉行するのは、彼(ハーカーン・ベフ)である。したがって、實際上、隣接の諸侯達が服属しているのは彼に対してである<sup>403</sup>。

しかし<sup>404</sup>、毎日、ハーカーン・ベフは至って控え目、謙虚・従順な態度で大ハーカーンのもとに行く。その際、彼は必ず片手に薪木を持ち、素足のまま入って行き、大ハーカーンに挨拶すると、その面前で薪木に火をつける。それが燃え尽きると、はじめ王(大ハーカーン)の玉座の右側に席をとる。

尚、クンドル・ハーカーン Kunder-Khaqan と呼ばれる人が彼(ハーカーン・ベフ)を補佐し、またクンドル・ハーカーンに仕える ジャーウシギル Jarwishghir と呼ばれる人が居る。

大王の慣例の一つ。彼は、先きにわれわれが説明した人達を除いて、決して誰とも盛ったり、話合うことはなく、入室することさえ許さない。

【国家の重要】諸問題の処理、刑法判決、懲罰や国家統治に関連する職務は、[すべて]大ハーカーンの摂政であるハーカーン・ベフにある。

§ 2. 大王の死去に際しての慣例は以下の通りである。

まず 20 戸の家屋が建つ大屋敷<sup>405</sup>が彼の為建造される。その各家の内部には、王の墓を掘り、その墓の中に、丁度、粉末眼薬<sup>406</sup>ぐらゐの大きさの石を敷きつめ、その上面には生石灰を蒔く。屋敷の地下は、河になっている。しかもその河は、水流のあるような大河である。その河の上に墓を造って、彼らは

「悪魔、人間[の霊]、虫けらやみみずがそれ(死体)に憑かないためだ」と説明する。

なお、王[の死体]を葬った後、[本当の]王の墓は、それら家屋の中の一体育何処にあるか誰にも分からないように埋葬に従事した者達の首は切落される。王の墓

「ハザルは天国と呼ばれる。したがって、彼らは

「彼は、既に天国に入られた」

と説明するのである。家屋にはすべて[その内部に]金を織りこんだ絨織が敷いてある。

§ 3. ハザルの王の「日常の」習慣は次の通りである。

その王は 25 人の妻を持ち、彼女達はすべて王の従属下におかれた諸侯達の娘である。王は彼女達を意のまま強制的に獲得した。

また、王は同衾を目的とする選抜きの美人<sup>407</sup>の侍妾奴隷 60 人を所有している。奴隷でない女<sup>408</sup>も妾達もすべて、各自チーク材を貼ったテントのある離宮にすんでいて、そのテントの周囲は広場(庭園)になっている。その女達各自には宦官が附添ひ、彼女達を匿っている。王が彼女達の中の一人との同衾をのぞむと、当の女を匿う宦官にその旨が伝えられる。すると宦官は即刻、その女を連れて来て、王の床に女を置く。宦官は、王のテントの入口に留り、王が女との交わりを終えると、その後は一時間たりとも余分に長く留ることなく、早速、女の手を取って、引きあげる。

大王が馬に乗る時、全軍隊は彼の護衛のために出勤する。しかし、王と騎馬隊との間には、1 マイルの距離が置かれる。民衆のある者が王の姿を見れば、深い恭敬の念から必ず地面にひれ伏し、王が通過してしまふまでは、決して顔を上げない<sup>409</sup>。彼らの王の在位期間は、40 年であり<sup>410</sup>、もし王がその年数を一日でも多く過ぎると、民衆および王の重臣は、

「彼はすでに理性を失ひ、その認識力も混乱してしまつた」

と言つて、王を殺してしまふ。

一たび[戦國に]軍隊が派遣されると、その軍隊は、いかなる事由があつても<sup>411</sup>、決して[敵に]うしろを見せない。もし敗北して、王のもとに退却してきた者は全員殺される。敵に敗れたとき、指揮官とその副将に対する処置として、先ず王は、彼らを妻子ともども呼出して、彼らの見守る目前で妻子を他の者達に与えてしまふ。その上、彼らの馬、生活用品、武器や家についても同様に処分してしまふ。また彼ら全員を真二つに切つたり、はりつけにしたり、木に首吊りにしたりすることもあり、時には特赦されて馬丁に取立てられることもある。

§ 4. ハザルの王は、アティル河の兩岸にまたがる大きな町を有している。その片岸[の町]には、イスラーム教徒が、対岸には王とその家来達が居る。

王の下僕の一人で、イスラーム教徒のハズ Khaz<sup>413</sup> という男が、[その国の] イスラーム教徒達を支配している。したがって、ハザル在留の、あるいは商業活動のためにその国を訪れるイスラーム教徒達 [の間に発生した事件] の裁定は、[王の] 下僕であるそのイスラーム教徒によって為されている。彼らイスラーム教徒の中で諸事情を審問して、裁決を下せるのは、彼を除いて他にいない。

この町<sup>413</sup>に居るイスラーム教徒は、一つの大モスクを持っており、聖なる金曜日にはそこに集まって礼拝する。そのモスクには、高い光塔があり、多数のムアッジンがいる。

310 年、イスラーム教徒がアル・バブーンジ *al-Babunji* 地区<sup>414</sup> にあったユダヤ教会堂を破壊したという報がハザルの王のところに伝わった時、王は、

「その [大モスクの] 光塔を破壊し、ムアッジン達を殺すべし」

と命令を下した。その上、彼は、

「もしイスラーム教の国内で、ユダヤ教会堂が暗かに破壊されるという恐れがある時には、私は、私は直ちにこのモスクを破壊するであろう」

と言った。

ハザル人<sup>415</sup> および彼らの王は、ユダヤ教徒である。サカーリバ人とその隣接の人々はすべてハザルの王の従属下におかれている。ハザル王は、彼らを隷属民として処遇し、一方、彼らは王に対して辞を低くして服従している<sup>416</sup>。

# 註

- 401) 《ハザル国について》に関する写本の本文は、僅か4行半しか残存せず、しかもその大半は復原頗る困難である。[Y], II 438-440 (Khazar) に残る [IF] の引用に依ってその一部を復原することはできるが、[Y] が述べた処をそのまま [IF] のものと考えすることはできない。[Y] の al-Khazar 項目の中には、[IF] の他に I. Rustah と Işakhtri からの引用箇所が認められるので、それら三者の知識を厳密に区別することは難しい。しかし、[Y] の wa-amnā malik al-Khazar fa-ism-hu 以下の文は、[Y] 自身による一部の改ゼン・増補の箇所を除けば、ほぼ [IF] の文を忠実に残していると思われる。例えば、lam……bi-wajhin wa-la sababin という [IF] に特長表現法が見られること ([註] 84, 398 を参照)、《ルース族について》の記事と対応した説明がある (二王制、埋葬法、王の日常生活での慣例) などの点からも明らかである。なお、[IF] 一行は、ハザル国を實際に訪問したとは考え難く、使節の一員であった 'Abdallah b. Bashru に拠って得た情報以下の記載の根拠を成している、と考えられる。[Y], II 436 が、「彼 (イブン・ファドラーン) の《報告書》の中で、彼はこの (Khazar) 国々で見聞したことを記した(chakara fi-ha mā shahada-hu bi-tika 'l-bilādi)」と述べている点は事実ではない。Dunlop, Khazar, 100-103 参照。

- 402) mutamazih. tanazaha は、く一戦の人々から離れた状態にある、(神聖なる状態にある) などの意。ハザルの三 (Khāqān) は、一種のシャマンと考えられるから、ここでは後者の意。この記事は Mas'ūdi, Akhbār 75 に載せるところとよく一致する。すなわち「そして次の様に言われている。彼らの大主は滅多に人前に姿を現わさず、たとえ現わしたとしても誰一人として彼の前に立つことはできない (wa-qila' inna malika-hum al-a'zama la yakadu yaḡharu wa-in ḡhara lam yaqum bayna yaday-hi aḡadin)」とある。

- 403) 此処の本文の記事は、I. Rustah, 149, Işakhtri, とともに共通する箇所がある。次に I. Rustah の伝えるところを一部転出すると、「彼らハザルの人々には、īsha と言われている王が居る。ところが實際の大主は Khazar Khāqān なのである。が、彼には、ハザルの法律上の行使権力は全くなく、ただ名目上の王にすぎない。一方、īsha が命令権をもっていて行政指導・軍隊 [の統制] に関して他に誰一人として追隨する者を許さない (wa-hum malikun yuqallu la-hu īsha wa'l-maliku 'l-a'zamu inna-mā huwa Khazar Khāqān wa laysa la-hu min ḡ'atī 'l-Khazari illa 'l-ismu wa miqdaru 'l-amri 'ala īsha ith kana fi 'l-qiyādai wa 'l-jushi bi'l-mawdi' 'ladhi la yubali ma'a-hu bi-aḡadin fawqa-hu)」とある。文中の īsha は、[IF] の言う Khāqān-beh に符合する。

- 404) 此処以下の写本 (2行) は、全く復原することができない。すべて [Y], 438-40 の記述に依って転出したものである。

- 405) dar kabtra.

406) al-kuhl. Dozy, II 446-7 参照。

407) ma min-hunna illa fa'iqat al-jamal.

408) al-ḥarā'ir

409) 此処は《サカーリバ国について》の記事と非常に類似する。前出頁 47 参照。

410) [註] 159 を看よ。

411) bi-wajhin wa la sabab. これは [IF] に特長的表現の一つであって、此箇所は確かに [IF] からの引用であることがわかる。[註] 17, 304, 401 を看よ。

412) [Y] のレニングラード写本には、Khazmat とある ([K], 273 n. 952). Mas'udī, Murūj 1 179 は、ハザル國のイスラーム教徒を代表する大臣として Ahmad b. Kuyat なる名を挙げているが、Kuyat は、[IF] の Khaz, Khazmat と明らかに同一人物、と考えられる。

413) [D], 166 n. 6 は、以下の [Y] の文は [IF] に拠ったものではないとし、テキストに載せていない。原文は [Y] の本文をそのまま [IF] のものと認めて訳出した。

414) fi dār al-Babunij (al-Babunai). [ZV] 102-3 n. を参照。

415) 此処は、[IF] の《サカーリバ国について》の記事を参照して、[Y] 自らが、加筆した部分と考えられる。

416) [Y], II 440 は、さらに続けて、「彼らの一人が語ったところに依ると、Ya'juj と Ma'juj こそは、ハザル人である、と」と記しているが、これは採らない。

## 索引

数字は原文ページを示す。なお、アラビア語の人名、地名に付されている冠語 al- は本索引に於ては省略されている。

## I 人名・地名

イサー・ブン・マラクム 'Isa b. Maryam.....39

イブン・アル・フラート Ibn al-Furat .....1, 6, 7

イブン・カーリン Ibn Qarin... 5

イブン・ファドラーン・アフマド・ブン・ファドラーン

イルビーズ Irkiz 河.....29

ウィスー Wisu 嶺.....45, 49, 51

ウザル Udhul 河.....28

ウールン Urun 河.....30

## カ行

カナル Kanāl 河.....29

カルダリーヤ al-Kardaliya..... 9

カンジャール Kanjala 河..... 29

キルミーン Qirmishin..... 5

クザルキーン Kudharkin ..... 5

クシュマハーン Qushmahān... 5

グズ al-Ghuzziya.....19ff, 29

クンダル・ハーカーン Kundar

Khaqan .....82

ゴブ・マゴグ・ヤジュージュ・マジュージュ

コラン Qur'an .....20, 44, 50

## サ行

サカーリバ al-Saqaliba

ザムジャーン Zamjan .....12

サムール Samur .....29

サラフス Sarakhs .....5, 7

サワフ Sawat ..... 5

ジャフアル Ja'far.....40

ジャフアル・アル・イマーム・アル・ムクタディル・ビッラ

ーフ Ja'far al-Imām al-

## ア行

アウラム Awram 河.....30

アスカル Askal 王.....52, 54

アティル Atil 河.....45, 50, 67, 83

アトルク・アトルク・ブン・カトラーン

アトラク・ブン・カトラーン

アトラク・バクル・アル・シッデ

アブ・アバ・バクル al-Siddiq

アブ・アッラーフ・ブン・バ

ーシュトウ 'Abd Allah b.

Bashu .....1, 7, 8

アフマド・ブン・アリー

Ahmad b. 'Ali..... 5

アフマド・ブン・ファドラーン

Ahmad b. Fadlan...1, 7, 24, 26,

30, 42, 43, 44, 45, 51, 52, 53, 54,

67, 74, 82

アフマド・ブン・ムサー

Ahmad b. Musa .....6, 7

アフリール Afrir..... 5

アムル Amul ..... 5

アムル・サマール

アリ・ブン・アブ・タリブ..... 9

アル・サフシュミーン

Arthakushishin .....1, 6

アルダク Arduku..... 9

アルドゥン Ardu 河.....28

アルミシュ・ブン・シルキ

Almish b. Shiki .....27

アルミシュ・ブン・ヤルトウ

ール Almish b. Yaltwar...1, 39

Muqtadir bi'llah .....39

ジート Jit .....12

ジーフ Jikh 河.....29

シムナーン Simān..... 5

ジャイハニー Jayhani .....5, 6

ジャイフーン Jayfun 河

ジャウシーズ Jawshiz 河

ジャハハ Jakhā 河.....30, 52

ジャフフシ Jakhsh 河.....29

ジャーム Jam 河.....28

ジャラムシャーン

Jaramshān 河.....30

ジュルジャーニーヤ

al-Jurjāniya.....9, 10, 12, 22, 37

シンド人 Sindi .....48, 49

スウルク Su'luk ..... 5

スーサン・スーサン・アル・ラ

ッシー

スーサン・アル・ラッシー

Susan al-Rassi .....2, 11, 38, 46

スーフ Sukh 河.....29

スワーズ Suwaz .....52

## タ行

大ハーカーン→ハーカーン・カ

ビール

ダスカラ al-Daskara ..... 5

ターヒル・ブン・アリー Tahir

b. 'Ali..... 5

ダムガーン al-Damghān..... 5

タールート Talut.....50

テギーン Takin 2, 8, 11, 12, 46, 50

トゥルハーン Turkhan.....27, 28

トルコ Turk

..... 1, 8, 10, 12, 19, 23, 29, 49





メルヴ製の織布	25
木製の人像	25, 68, 69
ヤ行	
薬物	2
ヤブグー yabghu	25
ユダヤ教会堂	84
陽物崇拜	30

ラ行	
リバー ト ribat	5, 12
ルース王の	
(宮殿)	74
(関官)	74
—人の	
(商業居留地)	67, 68

(体格)	67
(病人処置)	69
(人間供儀)	70, 72, 73
両唇歯	9

## Summary

Ibn Fadlān who has been regarded as a secretary to the Embassy of the Bulgars which had established their influence near the banks of the confluence of the Volga and the Kama, was an important reporter of the Northern countries at the beginning of the 10th century.

His work, that is to say *Risāla*, for a long while known only through incomplete quotations of other Muslim geographers, was discovered by a Turkish scholar Z. Veldi Togan in Mashhad in 1922.

The *Risāla* of Ibn Fadlān is divided into six chapters as follows:

### Preface

Ch. I From Baghdad to al-Jurjāniya.

Ch. II Countries of the Turks.

Ch. III The Bulgars.

Ch. IV The Rūs.

Ch. V The Khazar.

I made its translation with notes into Japanese from the manuscript which was discovered by Z. V. Togan and also from other revised editions. In my translation of this work, my research always tended towards the elucidation of the various kinds of geographical and historical works in which Ibn Fadlān's traces have survived directly or indirectly. Many Muslim geographers such as al-Isfahārī (Ibn Hawqal), Yāqūt al-Hamawī, Zakariyā al-Qazwīnī, Amin al-Rāzī and so on have made extensive use of this work. And it seems that one of the chief merits of this work has offered the people concerned the traditional origin to the Northern countries. Like this, the main purpose of my translation of this work is to acknowledge ascertain the original sources of the geographical knowledges among the Muslim geographers.

The translation of this work was made in a very comfortable atmosphere provided by the Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, in 1966-68, where I am working as a research assistant.

Hikoichi YAJIMA

Tokyo, Japan, August 1968.

Tokyo, Japan, August 1938.

HAROLD YALOW

as a research assistant.

After Tokyo University of Foreign Studies in 1936-38, where I am working now, for the Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and

The translation of this work was made in a very comfortable atmosphere

of this work is to recognize the original sources of the geographical

origin to the Japanese community. The title, the main purpose of my translation

the chief results of this work has shown the people concerned the traditional

and so on have made extensive use of this work. And it seems that one of

algebra (the theory) Yüchi al-Hamwani, Yüchi al-Qasbi, Yüchi al-Bat

the various kinds of geographical and historical works in which the English

translation of this work, my research should be made towards the translation of

an agreement by N. N. Togan and also from other related questions. In my

I made its translation with most into Japanese from the manuscript which

CP. IV. The History

CP. IV. The History

CP. III. The History

CP. II. The History

CP. I. The History

CP. I. The History

CP. I. The History

CP. I. The History

CP. I. The History



